

鳩間島・新城島（上地）の古墓調査

片桐千亜紀・岸本敬

Investigation of old tombs in Hatomajima Island and Aragusukujima (Kamiji) Island

Chiaki KATAGIRI and Takashi KISHIMOTO

鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書、沖縄県立博物館・美術館 別刷

2016年3月11日

Reprinted from Survey Reports on Natural History, History and Culture of
Hatomajima, Aragusukujima, Kuroshima Islands, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum

March, 2016

鳩間島・新城島（上地）の古墓調査

片桐 千亜紀*・岸本 敬**

Investigation of old tombs in Hatomajima Island and Aragusukujima (Kamiji) Island

Chiaki KATAGIRI* and Takashi KISHIMOTO**

はじめに

戦後、沖縄の墓地の在り方は大きく変化してきている。墓地行政では墓地の拡散化を抑制して土地の有効な活用を目指した合理化を進めようとしている(井口2015)。墓地の立地だけでなく、葬法も火葬の普及によって、風葬や再葬の習俗はほとんど失われてしまったと言っても過言ではないだろう。墓地の整理・統合が進む中、すでに無縁墓となって忘れ去られようとしている古墓も多い。琉球の失われゆく伝統的な葬墓制について、現段階で可能なかぎり記録しておく必要がある。そこで、鳩間島と新城島(上地島)において古墓の分布状況とその形態を中心とした考古学的・民俗学的調査を実施した。鳩間島においては民俗担当と共同で実施し、聞き取り調査にもとづいて墓の調査をするという複合的な調査を試みた。

現地調査は、鳩間島では2013年3月26日(火)・27日(水)の2日間、新城島(上地島)では2013年6月25日(火)・26日(水)・28日(金)の3日間実施した。

鳩間島

1. 聞き取り調査

民俗学的な葬墓制調査を行うため、鳩間島在住の大城安子氏、鳩間島公民館長の通事建次氏より聞き

取りを行った(写真1)。大城安子氏は西表島の古見出身で、1929(昭和4)年2月9日生まれ、聞き取り調査時は84歳になられていた。以下、その内容を記す。

鳩間島では、墓は「パカ山」と呼ばれる丘陵の周囲に砂岩の岩陰を利用した掘り込み墓が張り付くように無数に存在する。鳩間の墓は掘り込みである。近年、墓の他島への移転が進んでおり、空き墓が増えている。また、すでに無縁墓となっているものも多い。

死者がでると家の壁や床板をはずして木棺を製作した。木材をストックすることはなかった。昭和35年前後まで竈を利用して遺体を墓まで葬送したが、最後の人は松竹のオジィだった。竈は2名×4で担いで運ぶ。しかし、昭和40年代から過疎化が



写真1 聞き取り調査風景(左が公民館長の通事健次氏、右が大城安子氏)

※ 〒900-0006 沖縄県おもろまち3-1-1 沖縄県立博物館・美術館

* Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006, Japan.

※※ 〒901-2113 沖縄県浦添市大平1-27-1 沖縄県立大平特別支援学校

** Okinawa Prefectural Ohira special school for disabled children, 1-27-1, Ohira, Urasoe, Okinawa, 901-2113, Japan.



写真2 過去に龕屋があった場所

進み、島内で亡くなる人がいなくなってきたことから、龕は使用されなくなり、朽ちていった。龕は生者にとって怖い存在であったことがこの島でも確認できた。鳩間島の龕は西表島祖納の龕に比べてとても豪華なものだったという記憶が安子氏の脳には鮮明に残されているようで、繰り返し強調しておられた。

その龕は、戦前に石垣島に注文して作った。安子氏の母は、安子氏が西表の祖納に住んでいた時に亡くなり、祖納から帰ってきたときには庭に龕が置いてあり、母が亡くなった事をホントに実感した瞬間であった。また、安子氏の父は龕をととても忌み嫌っていた。龕屋は集落の西のはずれウブマイ（大前）に向かう途中の左側にあった（写真2）。

墓に到着したら、遺体が入った木管を墓内に安置して3・5・7年間の風葬を行う。墓内がまだ使用中（他の遺体の風葬中）だった場合は、地面に埋葬して骨化を行った。洗骨は家族・親族みんなで行い、男女の区別は無かった。骨化後はパナリ焼きの壺や厨子甕に骨を安置、南蛮焼きも利用した。

2. パカ山とウブマイ（大前）の古墓調査

聞き取りによって得られた墓の情報に基づき、現地調査を行った。調査はパカ山と道を挟んで南側に広がるウブマイ（大前）と呼ばれる地域である（図1）。

2-1. パカ山の掘込墓

パカ山の南西側裾で17基の古墓を確認した（図2）。古墓は安子氏からの聞き取りどおりすべて掘込墓であった。

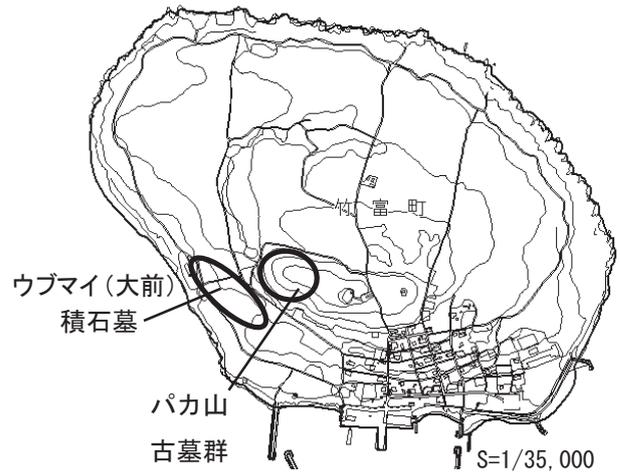


図1 鳩間島の古墓の位置

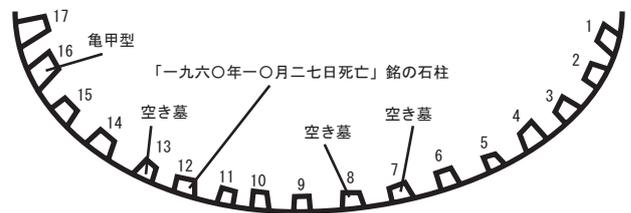


図2 パカ山の掘込墓（崖葬墓）配置

No.	位置	墓の種類	備考	座標
1	パカ山古墓群	崖葬墓	17基の掘込墓	N24° 28' 15" E123° 49' 06"
2	ウブマイのフズマレー	積石墓	未加工の礫	N24° 28' 11" E123° 49' 05"

表1 鳩間島の古墓概要

基盤は八重山層群の砂岩層を掘り込んでいと考えられるが、今回、地質担当である仲里の現地調査によって、この砂岩層と連続して八重山変成岩類トムル層も露出していることが示されたため、トムル層も掘り込んでいる可能性がある。墓は簡素な造りであり、図2の1～15までの掘込墓の入口は特に装飾的ではないが（写真3～10）、16は亀甲墓的な（写真11）、17は破風墓的な（写真12）装飾が施されている。

この内、墓7・8・13は入口の蓋石が取り除かれており、空き墓となっていることがわかった（写真5～8・10）。墓7は墓内の奥にわずかな段差を持つ柵を確認することができ（写真6）、墓8は墓内奥壁に垂直に掘り込む際に残されたと考えられる楔状の痕跡が確認できた（写真8）。これらの墓は、安子氏からの聞き取りによって得られた、他の島へ



写真3 パカ山の堀込墓1・2



写真4 パカ山の堀込墓3～5



写真5 パカ山の堀込墓7



写真6 パカ山の堀込墓7 (墓内)



写真7 パカ山の古墓群8



写真8 パカ山の古墓群8 (墓内)



写真9 パカ山の堀込墓9・10



写真10 パカ山の堀込墓12・13



写真11 パカ山の堀込墓16（亀甲型）



写真12 パカ山の堀込墓17

の移転が行われた墓である可能性が考えられる。

今回注目された点として、17基中、すべての墓が他の島々の一般的な墓と比較しても墓の面積・高さが狭いことがあげられる。鳩間島における墓の規模は極めて小規模だったようだ。調査日程が短く、具体的に数値化することができなかったが、実際に数値化して比較することによってその特色は鮮明になるはずである。このように、小さな墓はすぐにいっぱいになったはずである。そのような場合、どのように骨や蔵骨器を処理していたのか、現地調査では判断することができなかった。また、安子氏からの聞取調査では墓内に風葬中の遺体が安置されていた場合は、他の場所に埋めて骨化させたという。非常事態とはいえ、埋めるという葬法が存在していたことは極めて興味深い。今回の調査ではその場所や方法を特定することができなかった。今後、さらなる考古学的な調査を実施することによって遺体を何処に、そしてどのように埋めていたのかを明らかとする必要がある。

パカ山の古墓群には、パナリ焼きや厨子甕の破片が墓の周囲に多量に散布していた。しかし、南蛮焼は確認されなかった。安子氏は南蛮焼も見られたと言っていたが、沖縄産陶器と南蛮焼を間違えている可能性も考えられる。

2-2. ウブマイ（大前）の石積墓

聞取調査によって、鳩間島には「フズマレー」と呼ばれた石積墓が存在することを聞いた。その場所は、パカ山から道を挟んで南側に点々としているという。その墓がどのように利用される墓だったのか、当時すでに使用していなかったためにわからないということであった。しかし、墓であると伝わっていたという。

フズマレーの実態を確認するため所在確認の調査を行ったが、その場所は密林が生い茂っており、明確に判断することができなかった。しかし、未加工の石灰岩を乱雑に積み上げたマウンドを何カ所かで確認できたため、フズマレーとはこれのことを指している可能性があるが（写真13）、墓を決定づける遺物等が確認できなかったため、今後の課題とする。



写真13 ウブマイの石積墓？

新城島

新城島は上地島と下地島に分かれており、現在、上地島には人が住んでおり祭祀も行われているが、下地島は無人島となっている。両島とも現在では手つかずの密林の中に中世以来の石積集落跡が保存状態良好に残されており、土器や陶磁器、貝類等当時の遺物が散乱する。近年、竹富町教育委員会によ

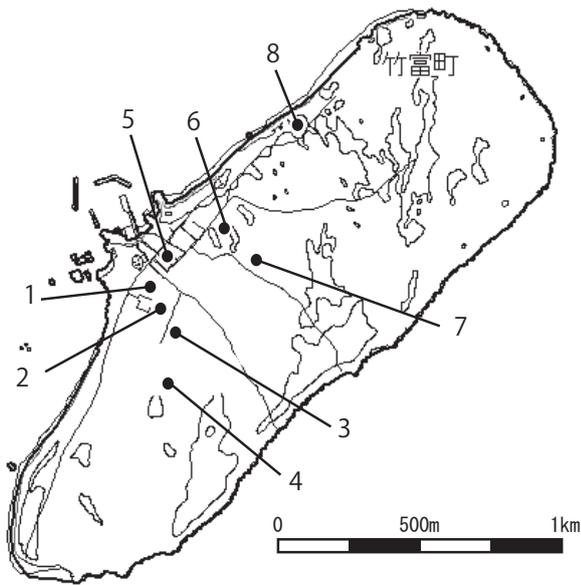


図3 新城島（上地島）の古墓分布

て竹富町史が刊行されており、考古分野では島袋綾野氏によって現地調査を含めた詳細がまとめられている（島袋2013）。このため、考古分野では上地島の古墓の状況について報告する。

1. 古墓群の位置

上地島では集落南側、集落内、集落東側、ボンヤマー遺跡周辺の4ヶ所で古墓群が確認できた（図3）。その形態的特徴と数は崖葬墓2基、石積墓10基、亀甲墓2基があり、墓に利用する石材を切り出した跡1ヶ所や、聞き取りによると風葬場跡1ヶ所も確認できた（表2）。

2. 集落南側の古墓群

集落の南側には緊急時用のヘリポートがあり、その周辺の密林の中に古墓群が存在する。今回確認できた古墓は石積墓4基、亀甲墓1基である。

2-1. No.1の古墓

まず、ヘリポート北側で確認された石積墓1（写真14）である。平面方形を呈し、ピラミッド状の2段構造からなり1段目は石灰岩の自然礫を積み上げ、2段目はビーチロックを方形に加工した直方体の石材を2～3列丁寧に積んでいる（写真15）。方形に加工された石材が積まれた2段目の規模は縦250cm×横335cm×高60cmを測る。1段目は深い

No.	位置	墓の種類	備考	座標
1	集落南エリア	石積墓1	ヘリポート北側	N24° 14′ 02.2″ E123° 56′ 25.7″
2	集落南エリア	石積墓2	ヘリポート東側	N24° 14′ 01.3″ E123° 56′ 27.2″
	集落南エリア	石積墓3	ヘリポート東側	〃
3	集落南エリア	石積墓4		N24° 13′ 54.0″ E123° 56′ 28.4″
4	集落南エリア	亀甲墓1		N24° 14′ 00.4″ E123° 56′ 29.9″
5	集落内	石積墓5	インチケーの墓	N24° 14′ 05.4″ E123° 56′ 28.5″
6	集落東エリア	崖葬墓1		N24° 14′ 09.5″ E123° 56′ 36.4″
	集落東エリア	崖葬墓2		〃
7	集落東エリア	亀甲墓2		N24° 14′ 08.0″ E123° 56′ 36.5″
	集落東エリア	石積墓6		〃
	集落東エリア	風葬場跡		〃
	集落東エリア	石切場跡		〃
8	ボンヤマー遺跡	石積墓7	ボンヤマー遺跡陸側入口	N24° 14′ 20.2″ E123° 56′ 44.6″
	ボンヤマー遺跡	石積墓8	ボンヤマー遺跡陸側入口	〃
	ボンヤマー遺跡	石積墓9	ボンヤマー遺跡陸側入口	〃

表2 新城島（上地島）の古墓概要

樹木に覆われて観察することすら困難な状況であった。墓の周囲にはパナリ焼きの壺や壺屋焼の散乱が見られた。



写真14 樹木に覆われる石積墓1



写真15 2種の石材利用の石積墓1

2-2. No.2の古墓

ヘリポート東側で2基の石積墓2・3が確認された。石積墓2は石灰岩の自然礫を積み上げており、方形を志向しているようにもみえる。天井部はビーチロックと考えられる方形の板石を乗せて蓋としている（写真16）。石積墓の規模は縦240cm×横210cm×高90cm、天井石の規模は縦160cm×横150cm×厚20cmを測る。墓には壺屋焼の急須の散乱が見られる。

石積墓3は石灰岩の自然礫及びテーブルサンゴを利用して積み上げているが、石積墓2のように天井の板は見られない（写真17）。石積墓の規模は縦190cm×横190cm×高70cmを測り、正方形を志向しているようだ。白化粧された沖縄産施釉陶器碗の散乱が見られる。



写真16 ヘリポート東側の石積墓2
(樹木に覆われ、形態を確認するもの困難)



写真17 ヘリポートの東の石積墓3

2-3. No.3の古墓群

No.2の古墓群よりさらに東、島の中央部を縦断する道の東側の密林内で亀甲墓1が確認された（写

真18）。平地を利用し石を積み上げるのみで構築しており、1基の独立した墓となっている。沖縄本島などでは、岩陰や丘陵を利用して亀甲墓を構築することが多いため、上地島におけるこのような亀甲墓の有り方は島独特の変化なのかもしれない。正面部分は砂岩を丁寧に切り出した直方体の石材を利用して積み上げており（写真19）、後背部は石灰岩の自然礫を利用して積み上げている（写真20）。石の加



写真18 亀甲墓1



写真19 亀甲墓1の正面



写真20 亀甲墓1の後背部分

工や積み方も丁寧であり高度な技術を駆使して構築された墓であることがわかる。墓口が空いており、周辺には多量の厨子甕や壺などの沖縄産陶器が散乱しているため（写真21）、すでに墓の移転が行われていると考えられる。



写真21 散乱する厨子甕や陶器

2-4. No.4の古墓

No.3の古墓群よりさらに南側の密林内で石積墓4が確認された。墓の中心には1本のガジュマルが生い茂っており、墓を包むように根が張り巡らされている（写真22）。形態的特徴は石積墓1と似ており、平面方形を呈し、ピラミッド状の2段構造からなる。1段目は石灰岩の自然礫を2列に積み上げているが、2段目はビーチロックを丁寧に切り出して加工した直方体の石材を3列に積み上げている。2段目の正面に墓口があり、やはりビーチロックを切り出して薄く加工した石材を立てて蓋としている（写真23）。

石積墓の規模は1段目が縦440cm×横410cm



写真22 ガジュマルに覆われる石積墓4



写真23 石積墓4の正面

×高90cm、2段目が縦310cm×横300cm×高60cmと大型であり、今回上地島で確認された石積墓の中では最大規模を測る。周辺にはパナリ焼きの壺や香炉、沖縄産施釉陶器の瓶、沖縄産無釉陶器の壺の散乱が見られた。

3. 集落内の古墓

3-1. No.5の古墓

「インチケーの墓」として知られるのが集落内にある石積墓5である（沖縄県教育委員会1980）。平面方形の石積墓で、石の積方から2段構造と呼べる。1段目は直方体に加工された石材を1列並べ、2段目以降は石灰岩の自然礫を積み上げて構築している（写真24）。この島でこれまで確認された2段構造の石積墓は2段のピラミッド状を呈しており、1段目に自然礫の石灰岩やテーブル珊瑚を、2段目に直方体に加工した石材を積み上げている。しかし、インチケーの墓はピラミッド状を呈しておらず、さらに、自然礫と直方体に加工された石材の積方が逆となっている点は特殊な事例である。天井部分にはビーチロックを切り出して薄く加工した板石を利用して天井石としている（写真25）。石積墓の規模は縦200cm×横200cm×高80cm、天井石の規模は縦55cm×横70cm×厚10cmを測る。

墓周辺には沖縄産施釉陶器の碗や瓶・香炉、沖縄産無釉陶器の瓶や壺、パナリ焼き、小さなヤコウガイ（写真26）やシャコガイ、イノシシ下顎骨（写真27）が散乱している。



写真24 インチケーの墓（石積墓5）



写真25 天井部



写真26 散乱するヤコウガイ・沖縄産陶器・土器



写真27 イノシシの下顎骨

4. 集落東側の古墓群

集落の東側では2カ所の古墓群を確認した。集落の北から中央部へと向かう道沿いにある崖葬墓と集落の中央部から東海岸へ向かう道沿いにある亀甲骨、石積墓、風葬場跡、石切場跡である。

4-1. No.6の古墓群

崖葬墓を2基確認した。石灰岩の岩陰を利用したもので、2基並んでいる。墓の前面には石灰岩の自然礫を多量に利用して石積で囲いをしている（写真28）。西側の崖葬墓1は墓口にビーチロックを切り出した板石を利用していたようで、現在は倒れた状態で入口が空いていた（写真29）。すでに移転が行われているようであった。幅230cm×奥160cm×高60cmを測る。東側の崖葬墓2は墓口としてテーブル珊瑚を利用して入口を閉じている（写真30）。幅190cm×奥70cm×高70cmを測る。周辺にはパナリ焼きの壺破片、シャコガイやティラジャーの散乱が見られる。



写真28 2基並ぶ岩陰墓（崖葬墓）



写真29 岩陰墓1



写真30 岩陰墓2



写真31 2基の入口を持つ亀甲墓2

4-2. No. 7の古墓群

集落中央部から島を横断し、東海岸へ抜ける道沿いから北へ向かってやや離れた密林の中で古墓群が確認された。確認された古墓は亀甲墓1基、石積墓1基、風葬場1基、石切場跡1ヶ所である。

亀甲墓2はNo.3の古墓群で確認された亀甲墓1と似ており、平地に石を積んで墓を構築している。ただし、入口は2カ所設けられている(写真31)。墓の前面部は直方体に丁寧に切り出した石や自然礫を利用して積み上げており、漆喰で丁寧に塗装されている。後背部は自然礫を利用して積み上げている。墓口は空いており、周辺には厨子甕のまとまった散乱が見られることから(写真32)、墓の移転が終わっているものと考えられる。散乱した厨子甕蓋の銘書には「明治四年十一月」が見られることから(写真33)、墓の移転はそれ以後であり、この墓が明治時代まで使用されていたことがわかる。



写真32 亀甲墓2に散乱する厨子甕

石積墓6は平面方形を志向しており、石灰岩の自然礫やテーブル珊瑚等を利用して構築されている(写真34・35)。天井の蓋が空いた状態で確認された(写真36)。墓内には中国清朝の青花皿が残されていた(写真37)。



写真33 厨子の蓋の銘書

その他、西泊宏信氏からの聞き取り調査によって「風葬場であった」と言われている場所が確認できた(写真38)。露出した石灰岩を利用しつつ、方形の凹地に自然礫を並べているように見える。

さらに、石灰岩を直方体に切り出した石切場跡が確認された(写真39)。これらは墓の石材として利用された場所であろう。このエリアはまだ多くの墓やそれに関連した施設が存在すると思われるが、樹木の繁殖が特に激しいエリアとなっており、容易に周囲の状況を確認することができなかった。



写真34 石積墓6



写真35 石積墓6の側面



写真39 石切場跡



写真36 石積墓6の墓内



写真37 副葬品の清朝青花碗



写真38 風葬場跡



写真40 ガジュマルに覆われる石積墓7

5. ポンヤマー遺跡陸側入口の古墓群

ポンヤマー遺跡へ陸側から入る場所で3基の石積墓7～9を確認した。

石積墓7は方形を志向しており、自然礫や直方体に切り出した石材を利用して石を積んでいる。この墓を中心にガジュマルが生い茂っており、その根は墓全体を覆っている(写真40)。

石積墓8・9は2基並んで構築されている(写真41)。2基ともに石灰岩の自然礫を利用して石を積み上げており、方形を志向しているようにみえる。石積墓8はやや小型で、天井部はテーブル珊瑚を

利用して蓋石としている（写真42）。墓の規模は縦170cm×幅190cm×高70cmを測り、蓋石として
いるテーブル珊瑚は縦60cm×横80cmを測る。石
積墓9は石積墓8よりは大型で、天井部はビーチ
ロックを切り出した板石を利用して蓋石としている
（写真43）。縦330cm×横350cm×高80cmを測り、
蓋石としているビーチロックの板石は縦200cm×
横210cmを測る。

周辺にはパナリ焼き、厨子甕、荒焼の壺や沖縄産
施釉陶器の瓶が散乱している（写真44～46）。



写真44 散乱する厨子甕



写真41 2基並ぶ石積墓8・9



写真45 散乱する沖縄産陶器の壺



写真42 石積墓8と蓋石に利用されたテーブルサンゴ



写真43 石積墓9と蓋石に利用されたビーチロック

まとめと課題

鳩間島及び新城島（上地島）の古墓の分布状況に
ついて形態的特徴を中心に調査した。

鳩間島ではパカ山と呼ばれる丘陵の裾部を利用し
た堀込墓（崖葬墓）が多数存在し、平地では自然礫
を使用した石積墓が存在する可能性があることがわ
かった。堀込墓は沖縄島などで確認されるものと比
べてその規模がかなり小さい。今後、入口や墓内の
大きさなどを数値化してその特殊性をより明らかに
する必要がある。また、聞取調査によって石積墓
が存在する情報を得たが、現地では自然礫のマウン
ドを確認したものの、骨や遺物の散布を認めること
ができず、確証を得ることができなかった。鳩間島
にも石積墓の墓制が存在したのか、今後の課題であ
る。

新城島（上地島）では、石積墓、亀甲墓、岩陰墓
（崖葬墓）、風葬跡を確認した。石積墓は自然礫やテー
ブル珊瑚等を利用したものや、さらに、直方体に切

り出した石材を利用して墓を構築したもの、その規模も大型のものや小型のものが存在し、バリエーションがあることがわかった。亀甲墓もあるが、それは、沖縄島等で見られるように丘陵や岩陰を利用したものではなく、平地に石を積んで構築している点で特異な形態であった。正面部分には直方体に切り出した石材を利用して丁寧に仕上げられており、後背部分は自然礫を利用していることなど、興味深い。石積墓は先島諸島でよく確認される墓制であり、沖縄島とは異なっている。亀甲墓の構築方法もこの石積墓からの延長線上で考えられるのかもしれない。今回の調査では石積墓の存在が目立ったが、風葬と再葬を行う岩陰墓（崖葬墓）も存在することは注意が必要である。

先島に一般的に見られる石積墓の存在や、鳩間島における小規模な堀込墓、新城島における平地に構築された亀甲墓の存在のように、近世期の琉球王国時代ではそれぞれの島によって独特の墓制が現れていた可能性がある。

墓の移転や墓地整理によって、琉球王国時代以来の葬墓制やその記憶が失われつつある現状を考えると、今後、考古学・民俗学・形質人類学等の総合的に詳細な古墓の調査を行う事によって、島々単位の独特の葬墓制を明らかにし、記録していくことが必要であろう。

謝 辞

鳩間島では、大城安子氏、公民館長の通事建次氏から、新城島ではパナリ観光の西泊宏信氏から、竹富町教育委員会では仲盛敦氏、石垣市教育委員会では島袋綾野氏より島の葬墓制や古墓の情報をいただいた。記して感謝申し上げます。

参考文献

- 井口学, 2015, コラム 8 戦後の墓地行政について, 沖縄県立博物館・美術館 (編) 『琉球弧の葬墓制—風とサンゴの甲い』, pp. 41.
- 島袋綾野, 2013, 第 1 節 歴 (原) 史時代の村落と島民, 竹富町史編纂委員会 (編) 『竹富町史 第 5 巻 新城島』, 竹富町, pp. 77-95.

沖縄県教育委員会, 1980, 『竹富町・与那国町の遺跡—詳細分布調査報告書—』.